

21世紀の第2四半期に際して

—2050年に向かって—

一般社団法人 洸楓座 代表理事 佐藤建吉

▼はじめに

今回は2026年の最初のコラムであり、年頭に関する話題を記した。また1月5日発行の年頭所感に寄稿したように、今年(21世紀の第2四半期)の始まりという巡り合わせでもあり、その長期的な視点についても触れたい。これらは共通して、時間の経過に関わる。こうした時間に関する話題は、私にとっては気がかりなことである。時間は私たちの暮らしにおいて、目に見えないもので、気が付いても取り戻せない。

▼二つの対応

仕事や挑戦などをプロジェクトとして取り扱うと、それはしばしば時間の締切りが問われる。それに制限されたり、それが約束となったりする。今年の大相撲初場所では、ウクライナ出身の大関・安青錦が優勝した。21歳の大関は、日本にきて3年の歳月で、連続優勝を果たした。

大相撲というプロジェクトも土俵という制限区域で、決まり手という規則(ルール)があり、相手との確執のち勝負が決まる。立ち合いまでの時間には制限があるが、勝負には時間の制限はない。しかし、連続して15日の長いプロジェクト期間が設定されている。

よく知られているがプロジェクトには、フォア・キャスティング(F・C)とバック・キャスティング(B・C)の二つがある。F・Cは、現在から未来に向かってプロジェクトの目標を年次ごとに積み重ねて最終年次まで進捗させるやり方である。一方、B・Cは、その逆で、未来のある時点(最終年次)における達成目標を定め、その実現のため最終年次から遡って年次ごとに達成目標を設定し、その年次までの目標を順次達成して最終の目標に向かって進捗させるやり方である。

大相撲の15日の勝負は、F・Cで、毎日の勝敗が千秋楽で優勝できるか否かが決まる。過程の積み重ねが結果を導く例であり、決してB・Cではない。大相撲以外でも、勝負に関わることはF・Cで行なうしかない。しかし、自己の頑張りや努力を採配できる取り組み(プロジェクト)では、B・Cも適用できる。

あるかもしれない。しかし、将来の状況が変わるような場合には、むしろその目標が時代遅れになってしまふ場合もあるだろう。

▼2050年への対応

21世紀の世紀の第2四半期は25年のスパンがある。その到達点が2050年である。それは、国家が約束した「カーボン・ニュートラル」の目標年でもある。その目標達成のシナリオとして、F・Cとすべきか、B・Cとすべきかである。

さて、第2四半期の始まりの年である2026年2月には、衆議院選挙がある。その結果、どの党が政権を担うかによっても、政策には差が出る可能性がある。先述の大相撲の1日1日を政策の1年次と考えると、毎日の取組み結果の積み重ねが千秋楽での優勝の獲得に、あるいは残念ながら殊勲賞や敢闘賞留まりというところもあり得る。

ウクライナへのロシアの侵攻に端を発し、天然ガスの価格高騰、産業や暮らしの面でも大きく変わり、むしろデジタル優先の経済となっている。すなわち現金決済は過去の作法となり、キャッシュレスが広がる。それは、

労働の有り様を変容させている。結果、さらなる変化としては、従来の「労働の対価」としての「カネ」ではない形態や感覚をつくり出している。これには、コロナ・パンデミックも影響を与えている。

▼国際社会での改革と変容

前項との関わりでは、国際社会における変容も大きい。アメリカ大統領の言動と政策に影響されたことでもあるが、その他多くの原因と結果が複合現象として世界に、そして私たちの暮らしにも影響を生じている。

今世紀における環境変化に代表されるのは、デジタル社会の台頭である。最近ではAIの普及とその変化に拍車を掛けている。これは、国際的な変革であり、インフラ形成が容易であり、先進国も途上国も差がない。

そこでも中国が大きな影響力をもち、あらゆる面で世界規範としての主導権を持つようになっている。

また、金融システムの変革が、これまでの資本主義社会の崩壊をも予測させている。従来のおカネという貨幣の利用より、むしろデジタル優先の決済となっている。すなわち現金決済は過去の作法となり、キャッシュレスが広がる。それは、

労働の有り様を変容させている。結果、さらなる変化としては、従来の「労働の対価」としての「カネ」ではない形態や感覚をつくり出している。これには、コロナ・パンデミックも影響を与えている。

いう間である。

大人は経験を活かし法則をもって対応し判断するので、有利のように思われていた。それは、これまでの時代で、これからは事態が逆転しそうでもある。これからの時代は、既体験が役立たないほど変化が大きくなる。またAIの方が、知識が豊富で、大人の経験よりも有効である局面が多くなるだろう。むしろ、未体験事案に対処する能力を持ち得た若者の方が、AIと協働し主導権を握る局面が増えるようになる。その方が、課題解決が簡単で、しかも適切で、時間的にも有利だからである。

すると、さらに新しい時代が描ける。それは、社会への適応と発信の優れた者(個人、世代、法人、国民、国家)が際立ってしまふような…。しかし、葛藤もあるだろう。なぜなら根底にあるのは、個人の自由意志だからである。

繰り返しになるが、時代が変化すると、予測を困難にする。それは、経験が意味をなさないということかもしれない。時間の経過について例えるなら、知らない街への往路は時間を長く感じるが、復路は短く感じる。理由は、往路は未体験であり、復路は既体験であるからと言われる。未体験の面が多い子ども時代は、1日も1年の長く感じるが、いろいろ経験して大人になると、あつと

「労働の対価」としての「カネ」ではない形態や感覚をつくり出している。これには、コロナ・パンデミックも影響を与えている。

また、金融システムの變革が、これまでの資本主義社会の崩壊をも予測させている。従来のおカネという貨幣の利用より、むしろデジタル優先の決済となっている。すなわち現金決済は過去の作法となり、キャッシュレスが広がる。それは、

労働の有り様を変容させている。結果、さらなる変化としては、従来の「労働の対価」としての「カネ」ではない形態や感覚をつくり出している。これには、コロナ・パンデミックも影響を与えている。

労働の有り様を変容させている。結果、さらなる変化としては、従来の「労働の対価」としての「カネ」ではない形態や感覚をつくり出している。これには、コロナ・パンデミックも影響を与えている。

のは、「詩人」の目線である。優れた詩人は、対象についての現実を観察し、思索し、その本質を独自の言葉で表現する。それは、新鮮であり、若者のように直喩すらされる。ある時は子ども目線のように遠慮がなく真理を追究する。それは、感動すら与える。そして、朽ちることがない。

筆者が注目するところの茨木のり子の詩にも見出すことができる。それは、「みずうみ」のごとく、自他と「対話」し、自分の「美しいとき」を見出し、「自分の感受性を磨き、倚りかからず」と自由を表現し、自分の生きる「歲月」を分析し遺韻したからである。詩の世界では、「子ども」は小さな大人ではなく、「子ども」は大人の父「とも」いえる存在であるとしている。それに倣えば、今年、そして2050年に至るシナリオは、詩人のように、じつじつと自己実現し、持続可能なよりよき未来社会を構築したいものである。

筆者が注目するところの茨木のり子の詩にも見出すことができる。それは、「みずうみ」のごとく、自他と「対話」し、自分の「美しいとき」を見出し、「自分の感受性を磨き、倚りかからず」と自由を表現し、自分の生きる「歲月」を分析し遺韻したからである。詩の世界では、「子ども」は小さな大人ではなく、「子ども」は大人の父「とも」いえる存在であるとしている。それに倣えば、今年、そして2050年に至るシナリオは、詩人のように、じつじつと自己実現し、持続可能なよりよき未来社会を構築したいものである。

筆者が注目するところの茨木のり子の詩にも見出すことができる。それは、「みずうみ」のごとく、自他と「対話」し、自分の「美しいとき」を見出し、「自分の感受性を磨き、倚りかからず」と自由を表現し、自分の生きる「歲月」を分析し遺韻したからである。詩の世界では、「子ども」は小さな大人ではなく、「子ども」は大人の父「とも」いえる存在であるとしている。それに倣えば、今年、そして2050年に至るシナリオは、詩人のように、じつじつと自己実現し、持続可能なよりよき未来社会を構築したいものである。

筆者が注目するところの茨木のり子の詩にも見出すことができる。それは、「みずうみ」のごとく、自他と「対話」し、自分の「美しいとき」を見出し、「自分の感受性を磨き、倚りかからず」と自由を表現し、自分の生きる「歲月」を分析し遺韻したからである。詩の世界では、「子ども」は小さな大人ではなく、「子ども」は大人の父「とも」いえる存在であるとしている。それに倣えば、今年、そして2050年に至るシナリオは、詩人のように、じつじつと自己実現し、持続可能なよりよき未来社会を構築したいものである。

筆者が注目するところの茨木のり子の詩にも見出すことができる。それは、「みずうみ」のごとく、自他と「対話」し、自分の「美しいとき」を見出し、「自分の感受性を磨き、倚りかからず」と自由を表現し、自分の生きる「歲月」を分析し遺韻したからである。詩の世界では、「子ども」は小さな大人ではなく、「子ども」は大人の父「とも」いえる存在であるとしている。それに倣えば、今年、そして2050年に至るシナリオは、詩人のように、じつじつと自己実現し、持続可能なよりよき未来社会を構築したいものである。

筆者が注目するところの茨木のり子の詩にも見出すことができる。それは、「みずうみ」のごとく、自他と「対話」し、自分の「美しいとき」を見出し、「自分の感受性を磨き、倚りかからず」と自由を表現し、自分の生きる「歲月」を分析し遺韻したからである。詩の世界では、「子ども」は小さな大人ではなく、「子ども」は大人の父「とも」いえる存在であるとしている。それに倣えば、今年、そして2050年に至るシナリオは、詩人のように、じつじつと自己実現し、持続可能なよりよき未来社会を構築したいものである。

筆者が注目するところの茨木のり子の詩にも見出すことができる。それは、「みずうみ」のごとく、自他と「対話」し、自分の「美しいとき」を見出し、「自分の感受性を磨き、倚りかからず」と自由を表現し、自分の生きる「歲月」を分析し遺韻したからである。詩の世界では、「子ども」は小さな大人ではなく、「子ども」は大人の父「とも」いえる存在であるとしている。それに倣えば、今年、そして2050年に至るシナリオは、詩人のように、じつじつと自己実現し、持続可能なよりよき未来社会を構築したいものである。

筆者が注目するところの茨木のり子の詩にも見出すことができる。それは、「みずうみ」のごとく、自他と「対話」し、自分の「美しいとき」を見出し、「自分の感受性を磨き、倚りかからず」と自由を表現し、自分の生きる「歲月」を分析し遺韻したからである。詩の世界では、「子ども」は小さな大人ではなく、「子ども」は大人の父「とも」いえる存在であるとしている。それに倣えば、今年、そして2050年に至るシナリオは、詩人のように、じつじつと自己実現し、持続可能なよりよき未来社会を構築したいものである。

筆者が注目するところの茨木のり子の詩にも見出すことができる。それは、「みずうみ」のごとく、自他と「対話」し、自分の「美しいとき」を見出し、「自分の感受性を磨き、倚りかからず」と自由を表現し、自分の生きる「歲月」を分析し遺韻したからである。詩の世界では、「子ども」は小さな大人ではなく、「子ども」は大人の父「とも」いえる存在であるとしている。それに倣えば、今年、そして2050年に至るシナリオは、詩人のように、じつじつと自己実現し、持続可能なよりよき未来社会を構築したいものである。

筆者が注目するところの茨木のり子の詩にも見出すことができる。それは、「みずうみ」のごとく、自他と「対話」し、自分の「美しいとき」を見出し、「自分の感受性を磨き、倚りかからず」と自由を表現し、自分の生きる「歲月」を分析し遺韻したからである。詩の世界では、「子ども」は小さな大人ではなく、「子ども」は大人の父「とも」いえる存在であるとしている。それに倣えば、今年、そして2050年に至るシナリオは、詩人のように、じつじつと自己実現し、持続可能なよりよき未来社会を構築したいものである。